

外国語活動・外国語科

桑山 賢司

1 外国語活動・外国語科における他者とともに編む子供とは

外国語活動・外国語科における他者とともに編む子供とは、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを感じながら、思いや考えを粘り強く伝え合うことで互いの存在と言語について理解を深め、自己を向上させようとする子供である。

2 外国語活動・外国語科における他者とともに編む子供の具体的な姿

(1) 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることについて

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる」とは、外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築することである。第5学年「This is my town?」の学習では、A児はメキシコに住む英語教師のB先生に「富山市のおすすめスポット」を紹介するために、自分が知っている有名な場所を紹介しようと考えた。しかし、同じチームのC児の「本当にここに行きたいかな。」という疑問をきっかけに「B先生の住むメキシコシティにあるものや、気候などを知りたい。」と考え、調べて分かったことをもとに、情報を整理し、新鮮な海鮮が食べられることをジェスチャーで表現したり、美しい雪景色を写真で表現したりと、伝える内容と表現の仕方を工夫するなど、考えを再構築した。このように、コミュニケーションを行う相手の文化的背景や、コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら、他者と関わり、柔軟に考えを再構築する姿を目指す。

(2) 言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを感じながら、思いや考えを粘り強く伝え合うことについて

「言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを感じながらも、思いや考えを粘り強く伝え合うこと」とは、相手の発する外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、もっている知識を総動員して他者に外国語で自分の思いを何とか伝えようとしたりすることである。第5学年「Where is the library?」の学習で、D児はものの位置を表現する際、既習の知識を総動員して正確に伝えようと努力したが、今の表現では十分に伝わらない困難さを感じた。そこで、友達がものの位置を表現する姿を注意深く聞いたり、自らALTに表現方法を質問したりすることで新たな言語表現に気づき、それをういて表現することで、より正確にももの位置を表現できるようになった。このように、コミュニケーションの難しさを感じながらも、伝えたい、分かりたいという思いをもち、粘り強く取り組み、よりよい表現を目指す姿を目指す。

(3) 互いの存在と言語について理解を深め、自己を向上させようとする事について

「互いの存在と言語について理解を深め、自己を向上させようとする」とは、自分とは異なる文化的背景をもつ他者の存在を受け入れ、そのよさを取り入れよりよいものを目指そうすることである。第5学年「Hello, everyone.」の学習で、E児はクラス全員と自己紹介のやりとりをした。多くの友達とやりとりをしたことを通して、「友達の好きなものについて、意外なことが分かってよかった。英語についても、いろんな表現の仕方が学べて、話すのが上手になったと思う。」と振り返った。このように、他者の理解が深まることに価値を見いだしつつ、相手の表現のよさを積極的に取り入れ、高まろうとする姿を目指す。

このように、外国語の学習では異なる視点や価値観に触れながらよりよい表現を目指して学び合う

ことで、子供たちは自己の高まりを実感し、他者に感謝し、互いを尊重し合うようになることを目指す。

3 外国語活動・外国語科における他者とともに編む子供を育てる教師の手立て

① 心理的安全性のある人間関係の構築

授業中に「間違えてもよい」「間違いながら学ぶもの」という前提をつくる。日本における外国語学習の問題として「間違いを恐れることで発話しない」ということがある。また世界の英語話者の多くは、第二言語として英語を用い、正しさよりも、伝わるコミュニケーションを重視しているという。言語は失敗しながら修正して学んでいくことでよりよく身に付くものである。「間違えてもよい」「間違いながら学ぶもの」という前提をつくるためには、「心理的安全性のある人間関係」を築くことが重要である。まずは、この考えを学級全体に浸透させるために、身近な話題で継続的に”Small talk”を行い発話する機会を増やす。またその際に正確な表現でなくても伝え合うことができる喜びを感じられるようにする。そして、教師自身が間違いを恐れずに英語を積極的に使って ALT や外国の方と英語でコミュニケーションする姿を見せることで、伝わるコミュニケーションを目指し、どんどん失敗しようという風土を作る。

② コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の明確な設定

内容面でコミュニケーションを行いたいと思える必要感を大切に単元構想する。例えば年度当初に友達同士で行う自己紹介をする場面であれば、「友達ともっと互いに知り合う」という目的を明確にもつことで、何をつたえると自分のことがわかってもらえるか。どういう問いかけが相手のよさを引き出せるのかについて真剣に考えられるようにする。また、相手が交流で訪れる外国人であれば伝える内容や、引き出したい情報も違ってくるので、用いる言語材料や表現も再考する必要がある。必要感をもって真剣に取り組むからこそ、友達の表現のよさを自分に取り入れたり、どう表現するとよいかを相談したくなったりする。このように、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等の明確な設定をすることで子供同士が編むための関わりに向かう必然性を生み出すようにする。

③ 言語材料の定着を図りつつ、コミュニケーションについて見直し、改善できる場の設定

どの子も基本的な言語材料を身につけられるようにする。そのために、音声中心に様々な形で十分に聞くことを大切にしながら発話できるよう、ペアやグループで繰り返しコミュニケーションをとる”Small talk”を継続的に行う。また、子供たちの言語能力には大きな差があるため、ICT 端末の録画機能を使って、発音の練習をしたり、自身の発話を見直したり個の学びも充実させることで、表現の定着を目指す。

また、表現の定着とともに、自ら、コミュニケーションについて見直し、改善できるようにする。そのために、単元当初に、前単元の振り返りをもとにした自己のコミュニケーション力向上のための目標を考えたり、教師や ALT による実演や動画資料等をもとに、見通しや憧れを抱いたりできる場を設定する。その後、その子供のコミュニケーション力の高まりが見られた場面や、子供が問いをもった場面を捉えて、自分や友達の表現のよさに気付くことができるようにする。具体的には、目標に照らし合わせた視点をもとに表現を比較・検討する場を設ける。教師は、ここでの気付きを意識化・言語化する支援を行い、気付きを自分の表現に生かせるようにすることで、資質・能力を高めていきたい。